ラシードッディーン『集史』第1巻「モンゴル史」の諸写本に見られる脱落

宇　野　伸　浩

（受付　2006年5月10日）

目　　次

1. は　じ　め　に
2. 『集史』「モンゴル史」の校訂テキスト
3. 『集史』「モンゴル史」の諸写本
4. 『集史』「モンゴル史」の良写本の残存状況
5. ウズベキスタン1620とトプカプ1518の比較
6. ま　と　め

1. は　じ　め　に

モンゴル帝国史の基本史料として価値の高い『集史』第1巻「モンゴル史」には，数多くの写本があり，それらはヨーロッパやイスラム圏各地の図書館・研究所に所蔵されており，すべてを見ることは容易ではない。かつてアリー・ザーデ A. A. Али-заде は，それらの写本を比較検討し質の高い校訂テキストを公刊したが[1]，「祖先紀」と「チンギス・カン紀」，「ジョチ・カン紀」から「クビライ・カアン紀」までは未刊行であり，完結した校訂テキストが待ち望まれていた。近年，イランのロウシャン M. Rawshan が新しい校訂テキストを刊行し[2]，アリー・ザーデの未刊行部分についても容易に利用することが出来るようになった。ロウシャンの校訂テキストが便利であることは間違いないが，残念ながら質的にはアリー・ザーデの校訂テキストより劣り，いくつかの点で問題があると思われる。

19世紀のカトルメール，ベレジンによる校訂テキストの刊行[3] 以来，『集史』「モンゴル史」を校訂する試みが数多くなされていながら，いまだに信頼できるテキストが完成しないことにはそれなりの理由がある。完成を困難にしている理由としては，(1) 世界各地の図書館に重要な写本が散らばっていること，(2)『集史』「モンゴル史」の部分によって写本の残り方

1） Али-заде 1957, Али-заде 1965, Али-заде 1980.
2） Rawshan & Mūsawī 1373/1994.
3） Quatremère 1836, Березин 1858, Березин 1861, Березин 1868, Березин 1888.

に違いがあり，利用すべき写本が部分によって異なること，(3) 様々な形の増補・脱落・削除が混在しており，校訂テキストを作成するときの判断が難しいこと，の3点をあげることができるであろう。

筆者はかつて，『集史』完成後にラシード自身が増補を行ったプロセスを明らかにすることにより，『集史』には初版『集史』と増補版『集史』があるとする説を支持・補強する論文を発表した[4)]。筆者はその後，前回の論文執筆時に未見であった2つの重要な写本（ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所所蔵写本番号1620，オーストリア国立図書館所蔵写本番号326）を調査することができた[5)]。その成果を踏まえて，主として増補版『集史』系統の諸写本に見られる脱落箇所を取り上げ，それらをどのように解釈するかについて論じてみたい。

各写本に言及する際には，以下の略号を用いることにする。

ウズベキスタン1620：ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所 Abu Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies, Tashkent, MS. 1620.

トプカプ1518：トプカプ・サライ博物館付属図書館 Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, MS. Revān köşkü 1518.

オーストリア国立326：オーストリア国立図書館 Österreichische Nationalbibliothek, Wien, MS. Codex vindobonensis palatinus mxt 326.

大英16688：大英図書館 British Library, MS. Or. Add. 16688.

イスラム議会2294：イスラム議会図書館 Kitābkhāna-yi Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, MS. 2294.

フランス国立1113：フランス国立図書館 Bibliothèque National, MS. Supplément persan 1113.

フランス国立209：フランス国立図書館 Bibliothèque National, MS. Supplément persan 209.

ロシア国立46：ロシア国立図書館 National Library of Russia, St.-Petersburg, MS. PNS46（旧サルティコフ・シュチェドリン公共図書館写本番号2458）.

大英7628：大英図書館 British Library, MS. Or. Add. 7628.

トプカプ282（『ハーフェズ・アブルー全書』）：*Majmū'a-yi Hāfiz-i Abrū.* Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, MS. Bagdād köşkü 282.

4） 宇野 2003a.
5） 宇野 2005，宇野 2006参照。

2. 『集史』「モンゴル史」の校訂テキスト

19世紀から『集史』第1巻「モンゴル史」の校訂テキストが作られてきたが，初期の校訂者は自国の利用しやすい写本を底本として用い校訂していた。世界各地に所蔵されている良写本を校訂してテキストを作るようになったのは，カール・ヤーンによるガザン・カン紀の校訂テキスト（Jahn 1940）からであろう。その後，アリー・ザーデが網羅的に良写本を収集・校訂したことにより，「モンゴル史」の校訂の質が一気に高まった。アリー・ザーデのテキスト（Али-заде 1957, Али-заде 1965, Али-заде 1980）は，基本的にウズベキスタン1620を底本とし，その他の写本で補いながら写本間の違いを注で示している。

一方，近年出版されたロウシャンのテキスト（Rawshan & Mūsawī 1373/1994）は，基本的にトプカプ1518を底本とし，他の写本で補った箇所を［　］付きで本文中に示すとともに，注でも写本間の違いを列記している。おそらく，ロウシャンはウズベキスタン1620を利用できなかったため，トプカプ1518を底本としたのであろう。その点はやむを得ないとしても，以下の点で校訂テキストとして不十分であると思われる。(1) ロウシャンは，第1巻「モンゴル史」全体について諸写本の校訂をしたのではなく，アリー・ザーデの校訂テキストがある部分についてはそれをそのまま利用し，新たに校訂をしていない。(2) 底本としたトプカプ1518を他の写本で補い［　］付きで示す際に，どの写本で補ったかを明記していない。(3) 全体的にイージーミスが多い。

3. 『集史』「モンゴル史」の諸写本

以上のように，第1巻「モンゴル史」については，いまだ十分な校訂テキストが刊行されていないのが現状である。本稿では，各写本の特徴を明らかにする作業の一つとして，ウズベキスタン1620，トプカプ1518に代表される増補版『集史』系統の写本を中心に，写本間の相違点，とくに脱落箇所を比較分析していくことにする。

第1巻「モンゴル史」の諸写本の写本系統については，すでに，志茂智子 1995，白岩 1997，赤坂 1998，白岩 2000，赤坂 2005の研究がある。それらの研究成果にもとづき，諸写本を写本群に分類してリストアップしておきたい。ただし，以下のリストは，従来取り上げられた写本すべてを網羅してはおらず，その中でも重要と思われるものに絞ってある。写本研究をする際に，すべての写本を分析の対象にすることが理想かもしれないが不可能に近く，実際にはどの写本が重要であるかを見極め，重要な写本に絞って分析する方が効果的であろう。ここでは，増補版の写本群 D，写本群 E を重視し，初版の写本群 A，写本群 B に

ついては重要なもの数点に絞ることにする。ただし，部分によっては初版の写本を重視すべき箇所もある。

まず，初版と増補版の違いについて説明しておきたい。初版『集史』は，おそらく1307年４月17日にラシードによりオルジェイトに献呈された３巻本あるいは２巻本『集史』である。その系統の写本を（1）に列挙したが，そのうち14世紀書写の写本は，写本群 A のイスラム議会2294だけであり，他は15世紀ティムール朝期の書写であり，脱落，加筆，改変などに注意する必要がある。増補版『集史』は1309年８月までに完成していたと考えられている『ラシード著作全集』に収められた４巻本『集史』である。巻数が増えただけでなく，第１巻『集史』の内容も部族編を中心に増補されたことが明らかにされている[6)]。増補版『集史』が完成された際に，部分的に削除・改変があったかどうかは，判断がもっとも難しい問題であり，これについては，筆者はまだ結論を得ていない。

（1） 初版『集史』

（a） 写本群 A

イスラム議会2294：イランのイスラム議会図書館所蔵。ナスフ体，14世紀書写。チンギス・カン紀の途中までしか現存せず。足利・田村・恵谷 1968所収。アリー・ザーデはこの写本を利用していない。

（b） 写本群 B

フランス国立1113：フランス国立図書館所蔵。ナスフ体，ヒジュラ暦819年（1416-1417年）頃に書写。

フランス国立209：フランス国立図書館所蔵。ナスターリーク体，ヒジュラ暦837年ラジャブ月（1434年 2-3 月）に書写。

（c） 写本群 C（『集史』1 巻「モンゴル史」2 巻「世界史」からなる）

ロシア国立46：ロシア国立図書館（旧サルティコフ・シュチェドリン公共図書館）所蔵。ナスフ体，ヒジュラ暦810年ムハッラム月の半ば（1407年６月）に書写。

大英7628：大英図書館所蔵。ナスターリーク体，15世紀前半（1433年以前）に書写。

トプカプ282：『ハーフェズ・アブルー全書 *Majmū'a-yi Hāfiz-i Abrū*』の一部として初版『集史』をそのまま収めている。トプカプ・サライ博物館付属図書館所蔵のこの写本は，『ハーフェズ・アブルー全書』の原本といわれている。ナスターリーク体，15世紀前半に完成。

6）『集史』の編纂過程，初版・増補版については，岩武 1994，岩武 1997，白岩 1997，白岩 1998，赤坂 1998，宇野 2003a 参照。

(2)　増補版『集史』

(a)　写本群 D

ウズベキスタン1620：ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所所蔵。ナスフ体，書写年は不明。

トプカプ1518：トプカプ・サライ博物館付属図書館所蔵。ナスフ体，ヒジュラ暦717年シャアバーン月終わり（1317年11月上旬）にバグダードで書写。

(b)　写本群 E

オーストリア国立326：オーストリア国立図書館所蔵。ナスフ体，書写年については14世紀後半とする説と15－16世紀とする説がある[7)]。アリー・ザーデはこの写本を利用していない。

大英16688：大英図書館所蔵。ナスフ体，14世紀ごろに書写とする説がある。

4.『集史』「モンゴル史」の良写本の残存状況

アリー・ザーデとロウシャンが底本として利用したのは，『ラシード著作全集』に収められた増補版『集史』である。上のリストの中に増補版は4種類あり，この4写本の欠点を補うことのできる写本としては，14世紀書写の初版『集史』であるイスラム議会2294を第一にあげることができる。この5写本がまず利用すべき写本であろう。しかし，『集史』「モンゴル史」は，部分によって写本の残り方に違いがあり，それに応じて校訂の仕方を検討する必要がある。写本の残存状況が部分により異なることを確認するために表1を作成した。この表にもとづいて，部分により校訂の仕方を変えざるを得ないことついて，例をあげて指摘しておきたい。

例えば，序文からチンギス・カン紀の途中までは，部分的な欠落はあるものの，比較的残存状況がよい。またクビライ・カン紀からガザン・カン紀までも，比較的よく残っている。それに対して，チンギス・カン紀の後半からオゴデイ・カアン紀にかけては，14世紀書写の写本が2写本しか残っておらず，オゴデイ・カアン紀の一部については14世紀書写の写本が1本も残っていない箇所さえある。その箇所については，15世紀書写の初版『集史』B 群，C 群の写本に頼らざるをえない。アリー・ザーデがオゴデイ・カアン紀の校訂テキストをすでに出版しているが，それはおそらく，利用すべき写本が少なく校訂作業が短時間で済んだからであり，正確な校訂テキストの作成が容易であったからではないと思われる。

この例は極端な場合であるが，部分によって上にあげた5写本の残り方は様々であり，5

7)　Jahn 1940, p. xiii，白岩 2000，p. 16，宇野 2005，p. 134.

表1　主要写本の残存状況

	序文・部族編	祖先紀	チンギス紀	オゴデイ紀	ジョチ紀
トプカプ1518	1b-44b	44b-62a	62b-133a	133b-155a（139b-140a の間に 1 葉欠落）	155b-167b
ウズベキスタン1620	1b-45a（6a-6b の間に 2 葉，14a-14b の間に 1 葉欠落）	45a-51a（46a-46b の間に9葉，51a の後に2.5葉欠落）	51b-104b（51b の前に 8.5 葉欠落，53a-53b の間に9葉欠落）	105a-127b （111b-112a は後世の挿入）	128a-139a（134a-134b の間に 1 葉欠落）
オーストリア国立326	1b-47a	47a-61b（61b の後に1葉欠落）	62a-115b（62a の前に1葉あまり欠落，116a 以後は後世の挿入）	———	———
大英16688	———	———	———	———	2b-8a ジョチ紀 2 章から
イスラム議会2294	1b-42b	42b-56a	56a-98b（99a 以後は欠落）	———	———
フランス国立209	1b-61a	61a-77b	77b-171a	171a-196b	197a-209b
ロシア国立46	42a-86a（前に欠落あり）	86a-99a	99a-143b（錯簡あり，後ろに欠落あり）	———	185a-190b（前に欠落あり）
トプカプ282	315b-341b	341b-349a	349a-390a	390a-402a	402a-407b

	チャガタイ紀	トルイ紀	グユク紀	モンケ紀	クビライ紀	テムル紀
トプカプ1518	168a-175a	175b-180b	181a-185b	185b-196a	196a-214b	214b-218a
ウズベキスタン1620	139b-145b （141a-141b の間に1葉欠落）	146a-150a	150b-155a	155a-165b（155b-156aは後世の挿入）	165b-184a（180b-181aは後世の挿入）	184a-187b（184b-185aは後世の挿入）
オーストリア国立326	———	———	———	———	166a-185a	185a-189a
大英16688	8a-18b	18b-25b	25b-32a	32a-47b	47b-76b	76b-81b
イスラム議会2294	———	———	———	———	———	———
フランス国立209	209b-217a	217b-222b	222b-228b	228b-242a	242a-265b	265b-269b
ロシア国立46	190b-196b	196b-200a	200a-204a	204a-214a	214b-229a	229a-236b
トプカプ282	407b-411b	411b-414a	414a-416b	416b-422b	422b-431a	431a-436a

	フレグ紀	アバガ紀	テグデル紀	アルグン紀	ゲイハトゥ紀	ガザン紀	オルジェイト紀
トプカプ1518	218b-240a	240b-254b	255a-260b	261a-267a	267a-269b	270a-342ba	343a
ウズベキスタン1620	188a-209b（199b-200a は後世の挿入）	210a-224a（210b-211a は後世の挿入）	224b-230b（224b-225a, 229b-230a は後世の挿入）	230b-238a（230b-231a は後世の挿入）	238b-241b（238b-239a は後世の挿入）	242a-264a（243b-244a は後世の挿入）	———
オーストリア国立326	190a-212a	212b-226b	227a-233b	234a-242b	243a-246a	246b-323b（以後は後世の挿入）	———
大英16688	81b-116a	116a-136b（136b の後に 2 葉あまり欠落）	137a-143b（137a の前に3葉弱欠落）	143b-156b	156b-162a	162a-291b	291b-293b
イスラム議会2294	———	———	———	———	———	———	———
フランス国立209	270a-295b	296a-314b	314b-322a	322a-329b	329b-333b	333b-442b	443a-483b（483b-530bアブー・サイード紀）
ロシア国立46	236b-247b	247b-261a	261b-266b	267a-271b（後に欠落あり）	———	297a-298b（前後に欠落あり）	———
トプカプ282	436a-449a	449a-458a	458b-462a	462a-466a	———	466b-515b	———

写本に含まれる写本だけで十分な校訂が行える箇所もあれば，脱文があるためにB群・C群の写本を参照しなくはならない箇所もある。

以上，第1巻「モンゴル史」の写本の残存状況が部分により違いがあること，それに応じて写本の利用の仕方が変り，どれを底本にするか，あるいは底本の部分的な欠落をどの写本で補うかを，その箇所の写本の残存状況に応じて変える必要があることを指摘した。校訂の出来不出来も，自ずと箇所によって差が出てくることになろう。

5. ウズベキスタン1620とトプカプ1518の比較

(1) ウズベキスタン1620の特徴

アリー・ザーデ以降に底本として利用されてきた写本は，トプカプ1518とウズベキスタン1620であり，トプカプ1518はロウシャンが主として底本として利用し，また日本においてもっとも利用されてきた写本である。一方，ウズベキスタン1620はアリー・ザーデが主として底本として利用したが，ロシア以外の研究者が利用できなかった写本である。

2005年8月にウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所においてウズベキスタン1620の調査を行った。この調査については別稿で報告しているが，写本の特徴について再度とりあげておきたい[8)]。

装丁は，こげ茶色の革装であり，表紙の四辺には花柄の模様がある。製本はやや傷んでいる。葉数は263葉。写本の紙のサイズは，縦39.7×横28.0 cm。表紙も含めた本の厚さは，6.5 cm。書写面の枠のサイズは，33.8×22.0 cm。1頁の行数は29行。紙は，やや厚手のあまり質のよくない薄茶色の紙。インクは，黒，赤，青，黄，金，茶。本文は主に黒で書かれており，重要な人名は赤または金，タイトルは，赤または青，まれに黄，茶で書かれている。枠は，細い赤の二重線。字体は，やや細めのなめらかなナスフ体であり，丁寧に書かれた読みやすい文字である。所々にナスターリーク体で書かれた頁があるが，これは欠落部分を後世に補充した箇所である。系図に付随した小さなミニアチュールがいくつか残っている。一方，系図のあるはずの頁が欠落している箇所があり，これは系図に付随したミニアチュールを入手することが目的で後世にその頁を取り去った可能性が高い。

(2) トプカプ1518の特徴

筆者は，かつてトプカプ・サライ博物館付属図書館で調査を行ったとき，トプカプ1518の閲覧を申請したが，製本の痛みが激しいため，閲覧を許可されなかった。従って，写本全体

8) 宇野 2006.

にわたる正確な情報を得ていない。以下にあげた写本の特徴は，白黒のマイクロフィルム，部分的なカラーの写真・動画[9]，白岩 2000から得た情報をもとに簡単にまとめておく。

装丁は，こげ茶色の革装であり，製本がかなり傷んでいる。葉数は343葉。写本の紙のサイズは，縦41×横29.5 cm。書写面の枠のサイズは，34×23.5 cm。1 頁の行数は29行。紙は，やや厚手の光沢のある紙。インクは，黒，赤を使用。それ以外の色については未調査のため不明。枠は，細い赤の二重線。字体は，なめらかな読みやすいナスフ体であるが，頁によってはやや雑に書かれている。ミニアチュールはついていないが，ミニアチュールのためのスペースはある。奥付が残っており，ヒジュラ暦717年シャバーン月の終わり（西暦1317年11月上旬）にバグダードで書写されたことがわかっている。

（3） ウズベキスタン1620とトプカプ1518の関係

ウズベキスタン1620とトプカプ1518を比べてみると，紙のサイズ，書写面のサイズがほぼ同じで，1 頁の行数が同じ29行であることから，同じ規格にもとづいて作成された写本であることがわかる。さらに，頁の最初の単語と最後の単語がまったく同じ頁が多数あり，両者が極めて近い関係にあることは一見してわかる。

ただし，両者は直接の親子関係にはないと筆者は考えている。その点について，例を挙げて簡潔に議論しておきたい。まず，もし両者が親子であるとすれば，トプカプ1518が親である場合と，ウズベキスタン1620が親である場合の 2 通りが考えられる。前者のトプカプ1518が親である可能性については，後掲の表 4 のように，トプカプ1518にあってウズベキスタン1620にはない脱文が存在することによってこの可能性は否定される。語句レベルの比較においても，トプカプ1518のみに見られる書写ミスが多数あるため，この点からもこの可能性は否定される。一方，ウズベキスタン1620が親である可能性については，より細かい分析が必要である。ウズベキスタン1620の方がトプカプ1518より書写ミスが少ないため，可能性としては，ウズベキスタン1620からトプカプ1518が書写された可能性がありうる。しかし，結論としては，筆者はこの可能性もないと考えており，その根拠として，ウズベキスタン1620に書写ミスがあり，それがトプカプ1518に引き継がれていない例を示しておきたい。

表 2 は，「祖先紀」のドブン・バヤンに関する記述の中の一文の末尾部分である。文末の動詞が，ウズベキスタン1620では ravand であるが，フランス国立209を除いて，主要な他の 5 写本はすべてāyand である。もし，ウズベキスタン1620がトプカプ1518の親写本であるとすれば，トプカプ1518も ravand となっているはずであるが，そうではない。従って，この事例は，ウズベキスタン1620がトプカプ1518の親写本である可能性を否定する根拠となりう

9） NHK 取材班 1992，pp. 45, 85, 127; NHK エンタープライズ 1993.

表 2

トプカプ 1518 fol.45a	ウズベキスタン 1620 fol.45a	オーストリア国立 326 fol.47b
بدیگر ولایات آیند	بدیگر ولایات روند	بدیگر ولایات آیند

イスラム議会 2294 fol.43b	フランス国立 209 fol.62a	ロシア国立 46 fol.86b	トプカプ 282 fol.342
بدیگر ولایات آیند	بدیگر ولایات روند	بدیگر ولایات آیند	بدیگر ولایات آیند

るであろう。なお，フランス国立209がウズベキスタン1620と同じである点については，フランス国立209はウズベキスタン1620と同系統の写本を参照している可能性がある。

ウズベキスタン1620とトプカプ1518が親子関係にないとすると，両写本が内容的に極めて近いことについて，どのような理由が考えられるであろうか。推測を含んでいるが，可能性が高いのは次のような状況であろう。トプカプ1518は奥付から確認されるように，1317年にバグダードで書写された写本である。当時，『集史』を含むラシードの著作の書写事業は，タブリーズのラシード区で組織的に行われていた。タブリーズで書写されたアラビア語・ペルシア語の写本は，イスラム諸都市に送られ，そこでその写本から書写されることがあったことがラシード区ワクフ文書補遺「写本作成指示書」に記されている[10)]。従って，トプカプ1518の親写本はタブリーズからバグダードに送られたと考えるのが妥当であろう。一方，ウズベキスタン1620は，トプカプ1518より書写が丁寧であり，書写ミスも少ないため，写本系統上においてより原本に近い位置にあることが考えられる。この2点を総合して考えられる仮説は，トプカプ1518の親写本とウズベキスタン1620とが，ともにタブリーズで書写された兄弟写本であったとする説である。推測を含んだ仮説であるが，この状況を想定すると，両写本が内容的に極めて近いこと，トプカプ1518の方が後述するように書写ミスが多いことを説明することができる。

（4） ウズベキスタン1620とトプカプ1518に見られる書写ミス

トプカプ1518については，すでに白岩氏が書写ミスの多いことを指摘しているが[11)]，ここでは，チンギス・カン紀の一部を取り上げて，そのことを確認しておきたい。取り上げるのは，チンギス・カン紀のチンギス・カンの即位についての記事である。この部分は，内容的に重要であるとともに，文と単語のレベルで写本間の違いが多い箇所である。この箇所を分析することにより，トプカプ1518に書写ミスが多いことを示してみたい。

まず，ペルシア語原文を引用する。下線を付した部分は，写本によって下線の語句・文が

10） 岩武 1995，pp. 296–297.
11） 白岩 1997，p. 7; 白岩 2000，p. 15.

欠けているが，その語句・文がある方が正しいと判断した部分である。[ ] でくくった部分は，写本によって [ ] の語句・文字が欠けており，その語句・文字がない方が正しいと判断した部分である。

حکایت قوریلتای **بزرگ** جینککیز خان که درآن **توقی** سپید نه پایه نصب فرمود و لقب جینککیز خانی براو مقرر گشت و عزیمت او بجنگ بویروق خان **پادشاه یک نیمه از قوم** نایمان و گرفتن **او** بویروق خان **مزکور** را
چون بمبارکی و فرخی پارس ییل که سال یوز باشد موافق **ماه رجب** سنه اثنتین و ستمائه هجری درآمد **هم** در اوایل فصل بهار جینککیز خان فرمود تا توقی **سپید نه پایه** برپای کردند و **بجمعیتی** با عظمت قوریلتای **بزرگ** ساخت **و در آن قوریلتای لقب جینککیز خانی بر وی مقرر کردند** و بمبارکی بر تخت بنشست. و مقرر این لقب کوکجو پسر منکلیک **ایجیکا** از قوم قونکقتان بود و او را تب تنکری می گفته اند. و معنی جینک قوی و سخت باشد و جینککیز جمع آنست مانند کورخان که لقب پادشاهان بزرگ قرا ختای بوده یعنی پادشاه قوی و معظم.
و چون آن جمعیت[**ساختند**] و قوریلتای تمام شد بعزم قصد [**جینککیز خان**] بویروق خان بر نشستند و او در حدود **اولغ** طاق بموضعی که آن را آب سوجاوو گویند قوشلامیشی می کرده و بی خبر بوده و جینککیز خان و لشگر[**ش**] چون قضای مبرم بر سر او رفتند و او را هلاک کردند و ملک و خانه و زن و بچه و گله و رمه او را بستدند. و برادرزاده او کوشلوک خان بوقتی که پدرش تایانک خان را کشته بودند **گریخته بود و پیش عم خود بویروق خان آمده و توقتا بیکی پادشاه مرکیت نیز چنانک پیش از این گفته شد هم پیش او آمده بود. ایشان هر دو پناه** بموضعی که نام آن اردیش است بردند بسر حد ولایت نایمان و عاقبت کار و حال ایشان فیما بعد گفته شود ان شاءالله العزیز.

この即位の記事について，主要5写本を比較した結果をまとめたのが表3である。ロシア国立46はこの部分が欠落しているため，代わりにトプカプ282（『ハーフェズ・アブルー全書』）を用いた。写本間で相違する箇所については，どれが正しいかを筆者が判断し，書写ミスと判断した方を網掛けにした。どちらが正しいかの判断は，微妙な場合があり，表3に示したものは，一案である。文法的に誤りが明らかな場合と，文法的にはどちらもありうるが，どれが原本に近いかという観点で判断した場合がある。表3を見てみると，まず両者に共通する書写ミスが多いことを確認できる。次に，両者が相違する場合は，すべてトプカプ1518の書写ミスであることがわかる。この傾向はこの記事に限らず，第1巻「モンゴル史」全体に及んでおり，トプカプ1518が，ウズベキスタン1620に比べて書写ミスが多いことはほぼ間違いないと思われる。従って，トプカプ1518は第1巻「モンゴル史」全体にわたってほとんど欠落がないという点では利用しやすい便利な写本ではあるが，書写ミスの多さという点ではウズベキスタン1620より劣る写本であると考えられる。

表3　チンギス・カンが即位したクリルタイについての節

		増補版『集史』			初版『集史』	
	ペルシア語文	ウズベキスタン1620	トプカプ1518	オーストリア国立326	イスラム議会2294	トプカプ282
1	قوریلتای **بزرگ** جینککیز خان	62a なし	90b なし	84b あり	83b あり	365a あり
2	درآن **توقی** سپید نه پایه	62a توقی	90b توق	84b توقی	83b توقی	365a توقی
3	بویروق خان **پادشاه یک نیمه از قوم** نایمان	62a なし	90b なし	پادشاه یک نیمه 84b	پادشاه یک نیمه از قوم 83b	پادشاه یک نیمه 365a
4	گرفتن **او** بویروق خان **مزکور** را	62a گرفتن بویروق خان را	90b گرفتن بویروق خان را	گرفتن بویروق خان را 84b	گرفتن او بویروق خان مزکور را 83b	گرفتن این بویروق خان مزکور را 365a
5	موافق ماه رجب	62a موافق رجب	90b موافق	84b موافق رجب	83b موافق ماه رجب	365a موافق ماه رجب
6	درآمد **هم** در اوایل فصل بهار	62a なし	90b なし	84b あり	83b あり	365a あり
7	**توقی سپید نه پایه**	62b توقی سپید نه پایه	91a توقی سپید نه پایه	توقی نه پایه سپید 84b	83b توقی نه پایه سپید	365a توقی نه پایه سپید
8	**بجمعیتی**	62b بجمعیتی	91a با جمعیتی	84b بجمعیتی	83b بجمعیتی	365a بجمعیتی
9	قوریلتای **بزرگ** ساخت	62b あり	91a なし	84b あり	83b あり	365a あり
10	**و در آن قوریلتای لقب جینککیزخانی بر وی مقرر کردند**	62b なし	91a なし	84b あり	83b あり	365a あり
11	منکلیک **ایجیکا**	62b ایجیکه	91a ایجیکه	84b ایجیکه	62b ایجیکا	365a 脱落箇所
12	آن جمعیت[**ساختند**] و قوریلتای تمام شد	62b あり	91a あり	84b なし	83b なし	365a 脱落箇所
13	**اولغ** طاق	62b الغ	91a الغ	84b الغ	83b اولغ	365a 脱落箇所
14	بعزم قصد [**جینککیز خان**] بویروق خان بر نشستند	62b なし	91a あり	84b なし	83b-84a なし	365a 脱落箇所
15	جینککیز خان و لشکر[**ش**]	62b لشکر	91a لشکرش	84b لشکر	84a لشکر	365a 脱落箇所
16	کشته بودند **گریخته بود..... ایشان هر دو پناه** به موضعی که **.....**	62b なし	91a なし	84b なし	84a あり	365a 脱落箇所

(5) ウズベキスタン1620とトプカプ1518に共通する脱文・脱葉

前述のように，ウズベキスタン1620は，トプカプ1518に比べて書写ミスが少ないことは確かであるが，筆者が重要だと考えるのは，両写本に共通する書写ミス，とくに脱文が見られることである。共通する脱文の例としては，前掲の即位の記事では，表3の10番・16番の脱文がそれに当たる。両者が親子関係にないという前述の主張が正しいとすれば，両者に共通する脱文があるということは，両写本の書写時のミスではなく，両者に共通する上位写本の書写時のミスによってすでに脱文が発生していたことを意味する。このような脱文が多いかどうかは，両写本の価値に大きく影響する問題である。また，脱文に限定して比較することは，単語レベルの比較に比べて数が限られるため，全体の傾向を把握しやすいという方法上のメリットがある。

そこで，増補版『集史』における脱文を，チンギス・カン紀からクビライ・カアン紀までを中心にピックアップして作成したのが表4である。ただし，脱落か削除か，あるいは後世の増補かについて判断が付かない箇所があり，その箇所は含まれていない。従って，この表4は網羅的なものではないことをお断りしておく。

表4のもとになったペルシア語原文を示したのが表5である。表5の［　］で示した部分[12]が当該の写本に存在するかどうかについて，表4において「あり」「なし」で示した。表4のその他の表示方法は，以下のとおりである。(1)省略があって部分である場合は「一部あり」とした。(2)本文中ではなく枠の外に書かれている場合は「あり 欄外」とした。(3)写本によって問題となっている部分の文章が異なる場合は，例えば2種類に分類できるのであるならば「あり 文①」「あり 文②」として示した。(4)脱文あるいは脱葉と判断できるものは，表4において網掛けをして示した。

さて，表4と表5から読み取れる脱文の特徴を見ていくと，書写の際に1行飛ばしてしまった初歩的なミスが比較的も多いことがわかる。例えば，表4の4番「カダアン・バアトルとクトラ・カン」はその典型的な例である。これは，トプカプ1518に見られる脱文であり，以下に引用したペルシア語原文を見てみると，上の行の حکایات hikāyāt と下の行の حکایت hikāyat を混同し，［　］の中を飛ばしてしまったという単純な書写ミスであることが明らかである。

و حکایات [ایشان بسیار است. و پسر پنجم قوتوله قآن و او با وجود برادران بعد از پدر پادشاهی کرده
و حکایت] او طولی دارد.

12) 表5において［　］内を補う際に，写本に優先順位をつけて用いた。まず重視したのが，ウズベキスタン1620，イスラム議会2294であり，次にオーストリア国立326，大英16688を重視し，この4写本で補えない場合にフランス国立209，ロシア国立46を利用し，さらに必要に応じてトプカプ282を利用した。

表 4

			増補版『集史』				初版『集史』		
	内容	ロウシャンテキスト	ウズベキスタン1620	トプカプ1518	オーストリア国立326	大英16688	イスラム議会2294	フランス国立209	ロシア国立46
1	ジェデイ・ノヤン	部族編 p.194, l.13-16	40b なし	40a なし	43a なし	―――	39a あり	55b あり	82a あり
2	カイドゥ・カンの息子たち	祖先紀 p.238, l.8,	―――	50b なし	52a なし	―――	47a あり	67a あり	―――
3	ジャウジン・フクル	祖先紀 p.238, l.14-239, l.6	―――	51a なし	52b あり	―――	47a-47b あり	67a なし	―――
4	カダアン・バアトルとクトラ・カン	祖先紀 p.249, l.11-13	―――	53b なし	54b あり	―――	49b あり	69b あり	93a あり
5	コンギラトとジョチ・カサル	チンギス紀 p.376, l.25-377, l.2	―――	80b なし	78a あり	―――	74b あり	101b あり	112a あり
6	コンギラトとジャムカ	チンギス紀 p.379, l.6-8	―――	81a なし	―――	―――	75a あり	102a あり	112b あり
7	フラン・ブルガト	チンギス紀 p,384, l.16-18	54a あり	82b なし	―――	―――	76a あり	103b あり	―――
8	コンギラト降服の節タイトル	チンギス紀 p.393, l.14-16	56a なし	84b なし	―――	―――	78a あり	106b あり	―――
9	クドカ・ベキとジャムカ	チンギス紀 p.416, l.9	61a あり	89b 異文混入	83a あり	―――	82b あり	113a あり	―――
10	ダイカル・クルガン	チンギス紀 p.419, l.16-18	62a なし	90b なし	84a なし	―――	83b あり	114a あり	―――
11	チンギス・カンの称号	チンギス紀 p.420, l.20-421, l.2	62b なし	91a なし	84b あり	―――	83b あり	114b あり	―――
12	ナイマンのクシュルク	チンギス紀 p.421, l.14-16	62b なし	91a なし	84b なし	―――	84a あり	114b あり	―――
13	カラキタイ	チンギス紀 p.464, l.15	71a なし	99b なし	93b なし	―――	93a 一部あり	126a 一部あり	―――
14	オゴデイ紀タイトル	オゴデイ紀 p.617, l.2-3	105a あり	133b なし	―――	―――	―――	171a あり	―――
15	タイル・ウスン	オゴデイ紀 p.620, l.6-8	105b あり 欄外	134a なし	―――	―――	―――	172a あり	―――
16	チャパル	オゴデイ紀 p.627, l.10-12	107a あり 欄外	135b なし	―――	―――	―――	174a あり	―――
17	命令とヤサクの章	オゴデイ紀 p.636, l.22-641, l.6	111b-112a 挿入頁	139b の後1葉欠落	―――	―――	―――	176b-177b あり	―――
18	スルタン・ジャラールッディーン	オゴデイ紀 p.654, l.8-10	115a なし	142b なし	―――	―――	―――	181b あり	―――
19	バヤン1	ジョチ紀 p.712, l.23-713, l.2	129a なし	156b なし	―――	―――	―――	198b あり	―――
20	バヤン2	ジョチ紀 p.713, l.18-21	129a あり 欄外	156b なし	―――	―――	―――	199a あり	―――
21	バヤン3	ジョチ紀 p.715, l.1-3	129b なし	157a なし	―――	―――	―――	199a あり	―――
22	クリの3子ミンガン	ジョチ紀 p.717, l.15	130a あり	157b なし	―――	―――	―――	200a あり	―――
23	チャガタイの息子	チャガタイ紀 p.751, l.15-16	139b あり 文①	168a なし	―――	11a なし	―――	210a あり 文②	191a あり 文③
24	チャガタイのタングート出軍	チャガタイ紀 p.764, l.8-10	143a なし	172b なし	―――	14a あり	―――	213b あり	194a あり
25	クビライの孫アーナンダ	クビライ紀 p.866, l.11	166b なし	197a なし	166b なし	48b なし	―――	243a あり	215b あり
26	クビライ第8子アバチ	クビライ紀 p.867, l.19-21	166b あり 欄外	197a なし	167a あり	49a あり	―――	243b あり	216b あり
27	冬営地	クビライ紀 p.901, l.24-902, l.1	175a なし	210b なし	176a あり 文①	62a あり 文①	―――	253a あり 文②	233b あり 文②
28	クビライのアミール	クビライ紀 p.906, l.12-907, l.3	176a あり 文①	206b あり 文①	177a あり 文②	63b あり 文②	―――	254a あり 文③	234b あり 文③
29	アフマド1	クビライ紀 p.916, l.20	178b なし	209a なし	179a あり	67b あり	―――	257a あり	222a あり
30	アフマド2	クビライ紀 p.922, l.14-15	179b なし	205a なし	180b あり	69b あり	―――	259a あり	223b あり
31	リンクン・カトン	クビライ紀 p.941, l.11-14	183b なし	214a なし	184b あり	75b あり	―――	264b 一部あり	228b あり

表5

1	و ببندگی جینککیز خان آوردند **[و بدو سپردند. و او ایشان را نواخت و دلداری فرمود و آن کودک را غمخوارگی نمود. و چون بزرگ شد امیری بزرگ گشت و نام او جدی نویان شد.]** و چون جینککیز خان....
2	و غیر از فرزندان بای سنکقور که جداگانه می آید **[بر این هیأت است که در جداول اثبات می یابد.]**
3	جاوجین هوکر **[اقوا م هورتکان و سیجیوت از نسل جاوجین هوکر اند و قوم قنکقتان هم از این اصل اند. بعضی از فرزندان او یکی را نام ییسوتو و یکی را نام دوروبتو بود و بوقتی که این دو پسر در راه دویدندی از بینی ایشان آوازی آمدی بدان سبب نام ایشان و فرزندان ایشان قونکقتان کردند. و شرح و تفصیل ایشان در شعب قونکقنان درآمده. و شعب قونکقتان بسیاراست و اکثر ایشان مخلص و هواخواه جینککیز خان و فرزندان او بوده اند.]**
4	و حکایات **[ایشان بسیار است. و پسر پنجم قوتوله قان و او با وجود برادران بعد از پدر پادشاهی کرده و حکایت]** او طولی دارد.
5	و جوجی قسار در آن حال از جینککیز خان **[جدا مانده و جبه پیش او بوده. قوم قنقرات میل کرده اند و خواسته که پیش جینککیز خان آیند و ایل شوند جبه جوجی قسار را]** تهییج و تحریض کرده تا قنقرات را دوانیده ....
6	و در آخر ایشان نیز جزو علت شده اند **[تا میان جینککیز خان و اونک خان به فساد آورده و با او بهم با جینککیز خان مصاف داده اند]** و عاقبة الامر جمله کشته گشته.
7	و اونک خان در پیش کوه مواوندور بموضعی که چوب بید سرخ رسته **[و مغولان آن را هولان بورقات گویند می آمده. دو نوکر از الجیتای نویان نام یکی تایجو و از آن دیگر جیکیتای ایدر اسبان]** به گله برده بودند یاغی را دیده در حال بدوانیدند و جینککیز خان را بموضع قلالجیت بود وغافل خبر کردند.
8	**[حکایت ایل شدن معظم قوم قنقرات و پیوستن به خدمت جینککیز خان در آن موضع که آب بالجیونه می خورده است و جمع آمدن دیگر امرای اقوام بر او و مطیع وی گشتن]** چون جینککیز خان ....
9a	و قوم اویرات مقدم ایشان **<u>قوتوقه بیکی و جاموقه از قوم جاجیرات</u>** و اقوام دوربان و تاتار و قتقین و سالجیوت تمامت پیش تایانک خان جمع شده بودند.
9b	و قوم اویرات مقدم ایشان **<u>چون اسب را لاغر دیدند تایانک خان با امرا</u>** و اقوام دوربان و تاتار و قتقین و سالجیوت تمامت پیش تایانک خان جمع شده بودند.
10	قوم اودویوت مرکیت را در قلعهٔ ای پیچید که **[آن را دایقال قورغان گویند. و یک قوم که ایشان را مودن گویند و قومی دیگر که ایشان را توداقلین گویند و قومی دیگر که ایشان]** را جوون گویند تمامت را بگرفت و باز گشت.
11	چون بمبارکی و فرخی پارس ییل که سال یوز باشد موافق ماه رجب سنه اثنتین و ستمائه هجری درآمد هم در اوایل فصل بهار جینککیز خان فرمود تا توقی سپید نه پایه برپای کردند و بجمعیتی با عظمت قوریلتای بزرگ ساخت **[و در آن قوریلتای لقب جینککیز خانی بر وی مقرر کردند]** و بمبارکی بر تخت بنشست.
12	و برادرزاده او کوشلوک خان بوقتی که پدرش تایانک خان را کشته بودند **[گریخته بود و پیش عم خود بویروق خان آمده و توقتا بیکی پادشاه مرکیت نیز چنانکه پیش از این گفته شد هم پیش او آمده بود. ایشان هر دو پناه]** بموضعی که نام آن اردیش است بردند.
13	در ابتدای حال رختری از قوم **[قراختای] [که اکثربت پرست باشند]** بخواست دختر او را به بت پرستی الزام کرد.
14	داستان اوکتای قآن بن جینککیز خان **[و آن برسه قسم است.]**

15	خاتون دوم توراکنه از قوم اوهات مرکیت و در بعضی اقوال چنان آورده اند که او زن طایر اوسون بود **[مقدم قوم اوهات مرکیت و چون شوهرش را بکشتند او را بغارت بیاوردند و اوکتای قآن او را بستد. طایر اوسون]** پیش از آن دختر خویش قولان خاتون را به جینککیز خان داده بود.
16	لیکن بعضی برادران او اوروس و دیگر **[شاهزادگان رضا نمی دهند و خواهر ایشان قوتولون جغان با ایشان یکیست و می گویند میان ایشان منازعت قایم است و عدد]** پسران قایدو علی التعیین معلوم نیست.
18	اگر شما بعدد و عدت مدد ننمایید من که بر مثال سدم از میان بر خیزم و شما را مقاومت با ایشان **[ممکن نکردد. برخود و فرزندان و مسلمانان رحم کرده وبفوجی لشکر با علمی هر یک مدد دهید تا چون آوازهٔ موافقت ما بایشان]** رسد پاره ای منزجر شوند و لشکریان ما نیز قوی دل گردند.
19	پسر اول قونیجی بایان **[از توقولون خاتون از قوم قنقرات در وجود آمده و بعد از وفات پدر از مادران اوکای خود سه خاتون ستده اول بارقوجین دوم جینکتوم سوم التاجو]** و سه خاتون دیگر داشته
20	بایان هزیمت کرد و بحدود ولایتی رفت که توقتای **[که قایم مقام باتو است نشسته و زمستان آنجا مقام کرده بهار گاه به قوریلتای پیش توقتا آمده و از او مدد خواسته. چون توقتای]** را با نوقای جنگ بود.
21	بایان بر قاعده اکثر الوس اورده را می داند **[و بسبب این مصافهای متواتر لشکر او درویش شده اند بعضی سوار و بعضی پیاده اما بر قرار. با خصم قوی حال می کوشد و از این]** جانب استمداد بمال می نماید.
22	فرزند نداشده است. **[این مینکقان در وقتی که پدرش قولی بدین ملک آمده بود خود و هر سه پسر مذکور با پدر یکجا اینجا آمده بود.]**
23 [文①]	**[اول مواتوکان دوم موجی یبه سوم بلکشی چهارم سارمان چنجم ییسون مونککا ششم بایدر.]**
24	چون جینککیز خان بعزم ولایت تنکقوت که باز یاغی شده بودند بر نشست. **[جغتای را فرمود که بر جناح لشکربس پشت اوردوها باشد. بر وفق اشارت بدان مصلحت مشغول بود تا وقتی]** که برادرش اوکتای و تولوی که با پدر بودند.
25	پسر سوم اننده **[و سبب این نام آنست که وقت ولادت او نزدیک]** قومی یاغی بودند که نام امیر ایشان اننده بود و او را همان نام نهادند.
26	**[پسر هشتم اباجی مادر او هوشتجین نام بوده دختر بورغول نویان از قوم هوشین و این پسر زن بخواست و مدتی با هم بودند و فرزند نیاورد.]**
27 [文①]	و قآن زمستان در آن سرای نشیند **[و نمودار آن بر نسخهٔ اصل که بنام پادشاه غازان خان بود منقش کرده بودند اینجا اختصار رفت.]** و خان بالیغ و دایدو را رودخانهٔ بزرگ است که از جانب شمالی که راه یایلاق است درحدود جمجیال می آید و آبهای دیگر هست و از بیرون شهر ناووری بغایت بزرگ مانند دریاچه ای ساخته ...
29	او گفت قآن مرا طلب داشته است **[می روم گاوفنجان نمی گذاشت.]**
30	قآن آن مکتوب را بخواست و دانشمندان را طلب داشت و از بزرگ ایشان بهاءالدین بهایی پرسید که این آیت در قرآن شما هست یا نه؟ گفت بلی هست.**[گفت قرآن خدایی شنوید؟ گفت بلی.]** گفت چون خدا فرمود که کافران را بکشید چرا نمی کشید؟ جواب داد که...
31	دختر کوشلوک خان بغایت عاقله و کافیه بوده وبیشتر زن قوتوقتو کون بوده و قوتوقتو از او پسری داشته **[توکال بوقا نام از قومهٔ قیچاق تونه ایکاجی نام زاده و این توکال بوقا بوقت بلوغ وفات یافت و دو دختر نیز داشته]** مهتر کلمیش اقا که او را به سالجیوتای کورکان دادند از قوم قنقرات و دختر کهتر شیرین اقا از قندز ایکاجی زاده از قوم باباوت.

このような脱文のうち，7番「フラン・ブルガド」，14番「オゴデイ紀タイトル」，22番「クリの3子ミンガン」[13]，31番「リンクン・カトン」は，トプカプ1518だけに見られる脱文であり，トプカプ1518書写の際に生じた書写ミスである。また，9番「クドカ・ベキとジャムカ」は，トプカプ1518にのみ表5の9b の下線部のような異文が見られる。これは2行下の文が誤って部分的に混入して生じたミスであり，これもトプカプ1518書写の際に生じた書写ミスである。

それに対して，前述のトプカプ1518とウズベキスタン1620に共通する脱文はどうであろうか。これは表4から明らかなように，筆者がピックアップできた脱文の中では，トプカプ1518書写時の脱文よりも，両者に共通する脱文の方が数はかなり多い。表4の8番「コンギラト降服の節タイトル」，11番「チンギス・カンの称号」，18番「スルタン・ジャラールッディーン」，19番「バヤン1」，21番「バヤン3」，24番「チャガタイのタングート出軍」，27番「冬営地」，29番「アフマド1」，30番「アフマド2」がその例である。ウズベキスタン1620の欄に「あり欄外」と書かれているのは，その文が欄外にナスターリーク体で書かれていることを示しており，これは脱文を後世に加筆したものである。従って，これも脱文と同じ扱いになり，15番「タイル・ウスン」，16番「チャパル」，20番「バヤン2」，28番「クビライ第8子アバチ」を加えることができる。なお，3番，4番，5番，6番については，ウズベキスタン1620の欠落箇所に該当するため，トプカプ1518とウズベキスタン1620の共通の脱文かどうかの判断が出来ない。

また，脱文だけでなく，フォリオごと脱落している脱葉が一箇所あり，17番「命令とヤサクの章」がこれにあたる。トプカプ1518は，分量から見てちょうど1葉分が欠落しており，脱葉だと考えられる。ウズベキスタン1620は，その部分にナスターリーク体で書かれた頁が1葉挿入されている。これは後世に補ったものと考えられるので，ウズベキスタン1620も，まったく同じ箇所の1葉脱落と考えられる。

以上，トプカプ1518とウズベキスタン1620に共通する脱文・脱葉について分析したが，増補版『集史』の3写本あるいは4写本に共通する脱文もあり，少なくとも4件確認することが出来る。表4の1番「ジェデイ・ノヤン」，10番「ダイカル・クルガン」，12番「ナイマンのクシュルク」，25番「クビライの孫アーナンダ」がそれに当たる。なお，ウズベキスタン1620とトプカプ1518の2写本に共通の脱文・脱葉として上げた15番，16番，17番，18番，19番，20番，21番については，該当箇所がオーストリア国立326，大英16688では大きな欠葉箇所の一部に当たるため，脱文・脱葉があったかどうかを判断できないのであり，3写本以上に共通する脱文・脱葉であった可能性もある。

13） これについては，赤坂 2005，p.13において，トプカプ1518の書写段階におけるミスであることが指摘されている。

以上のように，複数の増補版『集史』に共通する脱文がかなり多く見られることを確認した。これは，前述のように，現存する写本の書写時のミスではなく，共通する上位写本の書写時の書写ミスにより脱文が発生した可能性が高い。推測をするならば，タブリーズのラシード区で『集史』の書写事業を行った際に，書写の元になった写本に脱文があった可能性が考えられる。さらには，増補版『集史』の写本すべてに共通する脱文（25番「クビライの孫アーナンダ」など）については，増補版『集史』の原本そのものに脱文があった可能性も考える必要があろう。ラシードが，神学著作の執筆と同時平行で『集史』「モンゴル史」の増補，『集史』の「系譜集」の編纂を行い，『ラシード著作全集』を短期間で完成したことを考えるならば，増補版原本に脱文があったこともありえることである。

以上論じてきたように，アリー・ザーデが底本としたウズベキスタン1620は，最良の写本の一つであるが，表1のように欠落箇所の多い写本であり，残存している部分においても上述のように脱文・脱葉を含んでいる。従って，ウズベキスタン1620を底本として利用するとしても，他の写本で補うことは不可欠である。その際に，アリー・ザーデが利用しなかったイスラム議会2294，オーストリア国立326は有用な写本であり，ウズベキスタン1620の欠点を補うことができる写本である。しかし，表4から明らかなように，フランス国立209，ロシア国立46などのティムール朝期の写本にも部分によっては頼らざるを得ず，やはりこれらティムール朝期の写本も必要な写本である。

6. ま　と　め

（1）　トプカプ1518はウズベキスタン1620に比べて書写ミスが多い。アリー・ザーデがウズベキスタン1620を底本としたのは，やはり正しい方針である。ウズベキスタン1620は，写本系統上においてもトプカプ1518より原本に近い位置にある写本である可能性が高い。

（2）　文・葉の脱落について調べてみると，トプカプ1518とウズベキスタン1620には共通する脱落がかなりの数あり，増補版『集史』の3写本あるいは4写本に共通する脱文もある。これは，現存する写本の書写時のミスではなく，共通の上位写本の書写時における脱落であり，増補版『集史』原本に脱文があった可能性も考えられる。

（3）　ウズベキスタン1620は最良の写本の一つであるが，欠落箇所，脱文・脱葉をかなり含む写本であり，他の写本で補うことは不可欠である。その際に，アリー・ザーデが利用しなかったイスラム議会2294，オーストリア国立326は，ウズベキスタン1620の欠を補う上で有用な写本である。しかし，部分によってはフランス国立209，ロシア国立46などのティムール朝期の写本に頼らざるを得ず，これらも必要な写本である。

≪『集史』第 1 巻校訂テキスト一覧≫

E. Quatremère (ed.), *Raschid-eldin, Hisoire des Mongols de la Perse*, Paris, 1836.
И.Н. Березин (ed.), *Сборник летописей, История монголов. Сочинение Рашид-Эддина*, С.-Петербург, 1858 (ТВОРАО, ч.V), 1861 (ТВОИРАО, ч.VII), 1868 (ТВОИРАО, ч.VIII), 1888 (ТВОИРАО, ч.XV).
E. Blochet (ed.), *Djami el-Tévarikh par Fadl Allah Rashid ed-Din*, Tome II, Leyden-London, 1911.
K. Jahan (ed.), *Geschichte Ġāzān Ḫān's aus dem Ta'rīḫ-i-Mubārak-i- Ġāzānī des Rašīd al-Dīn Faḍlallāh b. 'Imād al-Daula Abūl-Ḫair*, London, 1940.
K. Jahn (ed.), *Ta'rīḫ-i-Mubārak-i- Ġāzānī des Rašīd al-Dīn Faḍl Allāh Abī-l- Ḫair, Geschichte der Ilḫāne Abāġā bis Gaiḫātū (1265–1295)*, 's-Gravenhage, 1957.
Bahman Karīmī (ed.), Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, 2jild., Tehran, 1338/1959.
А.А.Али-заде (ed.), *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами' ат-Таварих.* Том I, Часть 1, Москва, 1965.
А.А.Али-заде (ed.), *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами' ат-Таварих,* Том II, Часть 1, Москва, 1980.
А.А.Али-заде (ed.), Арендс (tr.), *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами' ат-Таварих.* Том III, Баку, 1957.
M. Rawshan & M. Mūsawī (ed.), *Jāmi' al-Tawārīkh*, 4 vols., Tehran, 1373/1994.

≪参 考 文 献≫

赤坂恒明　1998：「『五族譜』モンゴル分支と『集史』諸写本」『アジア・アフリカ言語文化研究』55, pp. 141–164.
――――　2005：『ジュチ裔諸政権史の研究』東京：風間書房。
足利惇氏・田村実造・恵谷俊之　1968：『イランの歴史と言語』京都：京都大学。
岩武昭男　1994：「ラシードゥッディーンの著作活動に関する近年の研究動向」『西南アジア研究』40, pp. 55–72.
――――　1995：「ラシード区ワクフ文書補遺写本作成指示書」関西学院大学東洋史研究室編『アジアの文化と社会』法律文化社，pp. 277–310.
――――　1997：「ラシード著作全集の編纂――『ワッサーフ史』著者自筆写本の記述より」『東洋学報』78-4, pp. iii-v+01-031.
宇野伸浩　2002：「『集史』イラン国民議会図書館写本の欄外の加筆」松田孝一編『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究（課題番号：12410096）平成12～13年度学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書（研究代表者松田孝一）』，pp. 129–149.
――――　2003a：「ラシード・ウッディーン『集史』の増補加筆のプロセス」『人間環境学研究』1-1·2, pp. 39–62.
――――　2003b：「イスラム議会図書館における『集史』写本調査」『日本モンゴル学会紀要』33，pp. 95–96.
――――　2005：「オーストリア国立図書館所蔵『集史』写本調査」『日本モンゴル学会紀要』35，pp. 133–134.
――――　2006：「ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所における『集史』写本調査」『日本モンゴル学会紀要』36, pp. 83–84.
志茂智子　1995：「ラシード・ウッディーンの『モンゴル史』――『集史』との関係について」『東洋学報』76-3・4, pp. 93–122.
SHIMO Satoko 1996: "Ghāzān Khan and the *Ta'rīkh-i Ghāzānī*: Concerning its relationship to the "Mongol history" of the *Jāmi' al-Tawārīkh*", *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* (Tokyo), 54, pp. 93–110.
志茂碩敏　1995：『モンゴル帝国史研究序説――イル汗国の中核部族』東京：東京大学出版会。
白岩一彦　1991：「『集史』パリ写本（Supplément persan 1113）について」『オリエント』34-1, pp. 17–31.
――――　1993：「『集史』テヘラン写本（イラン国民議会図書館写本2294番）について」『オリエント』36-1, pp. 55–70.
――――　1995：「『集史』研究の現状と課題」『日本中東学会年報』10, pp. 179–198.
――――　1997：「歴史家ラシード・ウッディーンの生涯と著作（資料紹介）」『アジア資料通報』35-2, pp. 1–

12.
――― 1998：「ラシード・ウッディーン『歴史集成』イラン国民議会図書館写本の成立年代について」『オリエント』40-2, pp. 85–102.
――― 2000：「ラシード・ウッディーン『歴史集成』現存写本目録」『参考書誌研究』53, pp. 1–33＋図（巻頭）4p.
SHIRAIWA Kazuhiko 1997: “Sur la date du manuscript parisien du *Ǧāmi‘ al-Tavārīkh* de Rašīd al-Dīn”, Orient（Tokyo）, 32, pp. 37–49.
NHK エンタープライズ 1993：『NHK ビデオ　大モンゴルⅡ蒼き狼チンギス・ハーン』廣済堂出版.
NHK 取材班 1992：『大モンゴル 1　蒼き狼チンギス・ハーン』角川書店.

付記：本稿は2004年度・2005年度広島修道大学総合研究所調査研究費による調査研究の成果発表の一部である。